

Title	石坂洋次郎「石中先生行状記根ツ子町の巻」論：時代の「伝説」化を衝く風俗小説
Sub Title	
Author	須山, 智裕(Suyama, Tomohiro)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2022
Jtitle	三田國文 No.67 (2022. 12) ,p.134- 142
JaLC DOI	10.14991/002.20221200-0134
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20221200-0134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

石坂洋次郎「石中先生行状記 根ツ子町の巻」論

——時代の「伝説」化を衝く風俗小説——

須山 智裕

はじめに

一九四八年に交わされたアルチスト・アルチザン論争において、花田清輝ら戦後派は、丹羽文雄ら風俗派をアルチザンと呼び表した上で、彼らの小説は世相を写すにとどまっておろ、批評精神を欠いていると盛んに攻撃を加えた。その後、アルチザンという片仮名言葉はほとんど使われなくなるが、「芸術家」と「職人」の二項対立図式は中村光夫が『風俗小説論』（河出書房、一九五〇年六月）で踏襲し、戦後派と同様に丹羽らに「職人」の側に振り分けた。これは、中村に同調した後続論文によって定説化が進み、風俗小説は一九七〇年頃までに「芸術」から締め出されたと言つてよい。^①

「日本近代文学において、風俗小説ほど、軽視されているジャンルはないだろう。風俗小説は浅薄かつお手軽な小説の代名詞といつても過言ではないだろう」と、山本芳明が批判的に指摘したのは二〇一二年のことだが、そうした状況は現在でも変わつていない。風俗小説は、他の小説ジャンルと全く同様に玉石混淆なのであり、ジャンルごと軽視されている現状は不条理

と言つてはかない。

そこで本稿では、石坂洋次郎が一九四八年から一九五四年にかけて書き継いだ、「小説家・石中先生なる人物が郷里の津軽に疎開して、そこで見聞した地方生活の義理人情をあれこれと描いた体裁」の連作（「あとがき」『石中先生行状記』新潮社、一九四九年七月）^②「石中先生行状記」のうちの「根ツ子町の巻」^③（『小説新潮』一九四八年九・一〇月）を読解し、同作が芸術的・社会的な価値を有する風俗小説の一例であることを示したい。^④

一、「好色文学」か「芸術作品」か

「根ツ子町の巻」の外在的な特異性は、『小説新潮』一九四八年一〇月号に掲載された後半の、「セックスを形どつた性神をめぐつて、中年の和尚と若い女との結びつきを描いた部分」が（藤村記者「文壇事件史―戦後編（19） 石中先生を受難」『讀賣新聞』一九六八年五月一二日）、警視庁保安課によって「風俗を壊乱するもの」と認定され、摘発が行われたことにある（「石坂洋次郎氏「石中先生行状記」エロ作品として摘発」『日

本経済新聞」一九四八年一〇月一四日)。敗戦後、出版法と新聞紙法は一九四九年五月の正式な廃止を待たずに事実上失効していたため、猥褻文書の頒布等を禁ずる刑法第一七五条を根拠とした摘発である(後、起訴猶予となる)。それ以前にも刑法第一七五条に拠る摘発は見られたが、「ほとんどがカストリ雑誌か春本のたぐい」だったため、「根ツ子町の巻」の摘発は、「文学作品」が狙われた最初の事例であった。⁵⁾

この事態を受け、文学者たちはまず、談話の形で意見を表明した。例えば丹羽文雄は、「私としてはあの内容程度ならかまわないと思う、世間には「金瓶梅」やなにかの訳本でなおひどいと思われるものが出回っている、(中略)警視庁のやり方は次第に昔に帰って行くような感じを受ける」と述べ(前出「石坂洋次郎氏「石中先生行状記」エロ作品として摘発」)、文芸家協会常任理事・石川達三は「好色文学と芸術作品との見解が当局には判らないのだろう、赤本やエロ雑誌の低俗な目的を持つた出版物がはん濫しているのに、それを取締らず石坂氏の作品を摘発するのは納得できない、これが前例となれば作家の良心的な活動も阻害されるわけで文化の前途が憂えられる」と語った(「文芸家協会たつゞ石中先生」果してエロか)『日本経済新聞』一九四八年一〇月一七日)。つまり、日本著作家組合書記長・中島健蔵が「問題は風紀警察の手によつて文学作品がこのように軽々しくとりあつかわれる処にある。この点に關しては石坂君の問題をはなれても、大抵の人が反対の意思を表明している」と概括した(「顔 石坂洋次郎 作家」『週刊朝日』一九四八年十一月一四日)ように、敗戦前の苛烈な言論統制が再来す

ることに対する警戒心が共有され、他でもなく「根ツ子町の巻」が摘発の対象とされたことの正当性を疑う声が相次いだのだ。⁶⁾

翌年には、今日出海が同作を「十八世紀のロココのエロティスム」たる「コント・エロティック」ではなく、「笑いや滑稽の要素が横溢」する「コント・ドロラティック」であると主張し(「社会の顔 石坂洋次郎 市川海老蔵」『社会』一九四九年二月)、なかのしげはるが「東北の一部にのこつている性器崇拜が批判的に描かれたこと、つまり文学として取りあつかわれたことが政治的に支配権力を刺した」と評価する(「フアシズム反対・民族独立のための斗争と文学との関係」『新日本文学』一九四九年二月)など、より理論的に石坂を擁護する言表がいくつも提出された。

それから七年ほど経って、十返肇は『わが文壇散歩』(現代社、一九五六年五月)の中で、「石中先生」が当局によつて起訴されたとき、文化に対する不法な弾圧として非難され「石中先生」は決して当局のいうが如きワイセツな作品ではないというのが文壇の輿論であった」と当時を振り返つた上で、同作は「警察力が発動された」がゆえに「実際以上に文明批評的な作品だなど」と評価されたに過ぎず、「決して文化の名に価するような芸術作品とは考えられない」と述べた。

確かに、同時代において評価を下される際、警視庁に摘発されたことが有利に働いたという側面もあるだろう。時が経ち、摘発への対抗という事情が外れてから「根ツ子町の巻」を読解する者が皆無に近くなつてしまつたことは、十返の主張を裏付

けるかのようなのである。だがそれは、『風俗小説論』以後の風俗小説の地位の低下や、発表した小説が次々と映画化される状況に象徴される石坂の流行「通俗」作家化といった大きな流れの結果なのではないか。同作を精読し、「好色文学」なのか「芸術作品」なのかを問い直す必要がある。

その際に定めなければならないのは、「芸術作品」の基準である。戦時の反省から、文学者が主体的であることが強く要求されていた当時、「芸術作品」の代表的な条件は、作者の立場や態度が表れていることであつた。それは、戦後派や中村が風俗派を芸術家ではなく職人だとする時、風俗や世相を写しているだけで、自身の立場や態度が表れていないという批判が定型であつたことなどが示している。本稿ではその基準を適用し、「根ツ子町の巻」が一九四八年の小説として「芸術作品」と言えるかどうかを考えたい。

ちなみに、石坂は警視庁に出頭した際、「文学作品を鑑賞するには、何が題材に扱はれてゐるかといふ観方でなく、その題材がいかに作品化されてゐるかといふ観方をしてみらひたい」といふ意味のことを調書に書いてもらつた（傍点原文）というが（『石中先生』の問題）『新潮』一九四九年一月、それはまさしく、文学研究の基本的な態度でもある。

二、根ツ子町の名コソビ

「根ツ子町の巻」は、冒頭に書かれてある通り、津軽も春めいてくる「三月」の出来事である。そして、吉田倉男が「一昨年の夏」執筆したという村井一心斎の弔詞の書き出しに「昭和

二十一年八月六日」とあることから、作中の時間は一九四八年三月であることが分かる⁽⁸⁾。これを指摘したのは、一心斎老人と共に文化講演の依頼に訪れた吉田青年に対し、石中先生が「君は、太宰治を崇拜してゐるんだね？」と尋ね、吉田青年が「さうです。太宰さんの在り方はいいと思ふんです」と答えるやり取りは、太宰が生きている頃に交わされたものであることを確認するためである。太宰は一九四八年六月一三日の深夜に、愛人の山崎富栄と玉川上水に入水したため、「根ツ子町の巻」が発表された同年九月にはすでに故人となつている。

郷土を同じくする石坂は自殺の報を受け、随筆「太宰治の死」（『新潮』一九四八年六月）を発表した。その中で石坂は、やはり津軽出身の葛西善藏を引き合いに出しながら、彼らに共通する特質として、常識への反逆性を指摘している。太宰を崇拜している吉田青年もまた「常識に反抗しよう」と、ロシアの民族衣装であるルバシカを着てベレー帽を被るという奇抜な服装をしている。また、招待された座談会で「話を一つもせず、酒をガブ／＼飲んでクダを捲いて帰つてい」く太宰の奔放な「スタイル」に陶酔しており、それを語る時には、「自分が太宰治でもあるかのやうに、胸を反らせて深刻さうな顔」をする。そして、コンセイ様を拝む女学生達に賛意を示しているやうに、卑俗な意味での性の解放に肯定的であり、「獲物を狙ふ猛獣」のごとき眼で「雪に寝転ぶ女学生達」を凝視する。しかし、それらはポーズに過ぎないやうで、実際のところの吉田青年は、女性問題などでたびたび親族に負担をかけた破滅型の太宰とは対照的に、「浮いた噂一つない模範息子」であるという。

また、「社会主義、手相、天文台が、一つの家庭の中に、仲良く同居して」いるように、社会も「いろんな弾き合ふものが一緒になつて出来て」おり、それで構わないのだとする石中先生の見方を、吉田青年は「さういふ割りきれたやうな通俗な考へ方はつまらん」と拒絶するとともに、石中先生が最近「新聞や大衆雑誌」に寄稿している通俗小説を「じつに愚劣だ」と批判する。だが彼は、「エロ雑誌や実話雑誌」の類も一心斎老人から借りて読むと言い、自室の本棚には「文学や哲学等の高級な本」の他に「通俗書も相当に並んでをり、全体に統一がなく」、石中先生はそこに彼の「チグハグな教養」を見て取る。さらに、一心斎老人の説教や小話に「科学的なロジック」を要求する一方、中国の戦場で彼の予言に命を救われた経験もあることから、「十中の七八はズバリと云ひ当ててゐる」と、その「カン」を認めている。

要するに吉田青年は、太宰のデカダンスに憧れて常識・良識への反逆を志向し、「何でも『愚劣』だと」否定してかかるものの、その生活態度は至って健全で、「愚劣」な事々となれ合うこともできる人物である。石中先生の通俗小説を批判した後、「エロ雑誌や実話雑誌」を読むことを「顔を赤くして」告白していることなどから窺えるように、吉田青年は、そうした自らの主義主張と実生活の乖離をはっきりと自覚しているが、それを埋めようとするのは、自己防衛のためにやむを得ないことだろう。「愚劣」な事々の否定を徹底するならば、戦争のせいで「ノルマルな教育を受けられ」ず、「チグハグな教養」しか持たない自分自身をも滅却する方向に進まざるを得ないか

らである。

その吉田青年と「友情」を成立させている一心斎老人だが、パソナリテイは対照的である。彼は戦争中、日本にとつて都合の良い予言をする「東方の予言者」として活動していたが、戦後は「民主的易学創始者」を自任している。石中先生に言わせれば、「無邪気で率直で、むしろ微笑ましいほど」の転向・便乗ぶりである。ただ、「民主的」の内実は不明で、コンセイ様を前にした女学生達に対する「戦争中に流行した日本精神論と揆を一にした」「ロジックをまるで無視した強引な説教のすすめ方」などから推察されるように、おそらく看板を付け替えたに過ぎない。転向に関するそうした諸問題を吉田青年に皮肉られても「陽気な高笑ひで吹き飛ばしてしまふ」、「無邪気」で自省をしない人物である。妻の澤木ヨシ子もまた「無邪気」な人柄であり、二人は「ポツコ」と呼ばれるほどあどけない娘と「和尚様」が突飛な理由で交わり、夫婦となったことが正當かどうか疑うことはなく、「至つて濃やか」な「夫婦の愛情」を育んでいく。猜疑の眼を自分にも社会にも向けることなく、何事も笑い飛ばすことで、通時的／共時的矛盾に満ちた戦後社会に適応し、幸福に生きていくことができるのである。

三、「フイクシヨン」と「デフォルマシオン」

石中先生は、根ツ子町での講演会の当日、一心斎老人の家で風変わりな逸話を次々と聞いたことにより、世界が異化されかける。この場面は、初出と初刊で語りの順序が異なっており、それを簡略化して示すと次のようになる。

【初出】「豚はジヤムプの名人」(一)↓お婆さんの訪問↓「豚はジヤムプの名人」(二)↓老夫婦の訪問↓「豚はジヤムプの名人」

(三)↓眠り

【初刊】「豚はジヤムプの名人」↓お婆さんの訪問↓老夫婦の訪問↓眠り

つまり初出では、出来事が時間の経過に沿って語られているため、老夫婦の訪問に起因する「いろいろ話を聞いてみると、石中先生は、ふだん住んでゐるのは、まるで違つた世界へ連れこまれていくやうで、心細い気がした」という述懐が、途中に出てきている。だが初刊では、「一心齋老人の童話「豚はジヤムプの名人」が一括で示された後に、「書きそびれた」こととして、ボツコ夫人が二度、来客のとりつぎで姿を現したことが語られるため、述懐と眠りが次のように連続している。

酒が利いて來てるせゐもあるのか、豚がジヤムプしたり、未申の老夫婦の侍人がシベリヤで伐採をやつてゐたり、『沢水困』で命拾ひをしたり、そんな風變つた話を聞かされてゐる間に、石中先生はふだん住んでゐるのは、まるで違つた世界へ連れこまれていくやうで、フハ／＼と身体が浮き上る思ひがした。それと同時に、スキ焼で満腹したせるか、目がしぶく頭が痺れて、猛烈に眠くなつた。

(中略)

明るい座敷の一隅で、前後不覚にグツスリ眠りこんでしまつた……。

いくつかの風変わりな逸話が、石中先生の「ふだん住んでゐる」世界から遊離する感覚と眠りに収斂するように、語りの順序が組み替えられたことで、同様にその感覚と眠りを連ねるラストシーンとの対応関係が明確になつてゐる。

そのラストシーンを導くのが、石中先生によつて「これは、どうして、大変な文学だよ……」と称賛される、吉田青年の弔詞である。石中先生はそれ以前、「科学的なロジック」を「ほんとの文学する精神」だとする吉田青年の主張を打ち消すように、「文学にはフィクション(虚構)といふことも認められる」と発言して「文学」を性格づけているが、弔詞は確かに、実録ではなく「フィクション」である。そもそも、吉田青年がなぜ一心齋老人の家の「コンセイ様を祭つた密室」での十年以上前の出来事を詳細に書くことができたのかと言へば、それが一心齋老人から古老達へ、古老達から吉田青年へと口伝えされてきたからであり、その過程における虚構の混入の可能性を、吉田青年は弔詞に書き込んでいる。具体的には、「沢山威」(女を娶るに吉し)という卦が結婚を後押ししたという結構について、「一説には、この占ひの話はインチキで、オヤヂがあとで創作して流布したものだとも云はれてゐる」「この辺はどうもくさい」と括弧を付して述べている他、ボツコ夫人の正体は女狐であるという説に対し、「――と町の古老達は信じてゐた」と付け加え、吉田青年自身はそれを虚妄と考えていることを暗示している。ただ、これらの記述は虚実を腑分けしようとしているというより、ある出来事が何度も口伝えされる中で、真偽不明の様々な「説」が添加されていき、全体として「フィクション

ン」へと接近するさまを跡付けていると捉える方が妥当だろう。

このことについて考える際、「フイクシオン」と共に鍵となるのが「デフォルマシオン」という語である。二尺余りのコンセイ様で「身体を試してみ」て、「嫁になれない片輪の身体である」と勘違いしたボツコに対し、一心斎老人は「すべて神様には誇張があるものぢや。儂のコンセイ様も、あれはデフォルマシオン（変形）であるぞ」、「このデフォルマシオンとは、宗教と芸術には欠くべからざる要素なのぢや」と諭す。吉田青年がこの発言は、「宗教」はともかく「芸術」に関しては受け売りに過ぎないのであろうが、「芸術」の一種たる「文学」の成立過程を言い当てている。つまり、現実の一面に「デフォルマシオン」が施され、「フイクシオン」としての「文学」が生成されるということだ。

これは、同時代において広く共有されていた文学観であった。それを象徴的に示すのが、アルチスト・アルチザン論争の両極にある文学者が同様の主張を展開していたという事実である。「私は近頃、あちらこちらで小説に於ける造型とか、デフォルマシオンといふことを言つてゐる」と自ら述べているように（「私は小説家である」『改造』一九四七年九月）、「デフォルマシオン」の主唱者は丹羽文雄で、「小説とは人生の仮構だ。

現実の上のうち建てる第二の現実だ」と訴えていた（座談会「小説に就て」『文學界』一九四七年六月）。一方、戦後派が座談会「小説の面白さ」（『綜合文化』一九四八年五月）で丹羽に

ついて語り合う中に、以下のような一幕が見られる。

佐々木（基一——引用者注）（前略）丹羽文雄の場合には、現にあるものしか見えないんだなア。そういう点では、主観を交えないで書くから、描かれているものは正確な素材だ、という気がするんだなア。あの素材の上にもう一つ出来るものが本当の芸術じやないかという気がするんですね。

椎名（麟三——引用者注）賛成だなア。

花田 彼はデフォルマシオンということはしきりに云つているけど（笑）……

丹羽が「デフォルマシオン」をなし得ているかについて、当人と戦後派の評価は真逆であるが、両者の文学観そのものは驚くほど近い。石中先生は、こうした文脈で「文学」たる弔詞を「すぐれた読物」として気楽に享受するが、そうした気分は吉田青年の意味深長な発言によって一変する。

四、「伝説時代」という批評

「先生、伝説と云へば、わが根ツ子町の生活が全部、伝説の中を彷徨してゐると云つてもいいのですよ。農地改革もデモクラシーも男女同権も、平和主義も、血の匂ひがする伝説の中で、みみずのやうにヒク／＼蠢めいてゐるので。……町の一部の年寄達の間では、この僕が、八卦オヤヂの落胤だといふ説も信じられてをります。（中略）例へ

ば、オヤヂの落胤だとしても、それが何でせう。どうせ僕達は血なまぐさい伝説時代に住んでゐるのですからね……」

吉田青年の頬がこけて青ざめた顔と、一心斎老人のつや／＼とした赤い寝顔を見較べてみると、落胤の説が、怪しく石中先生の胸に沁みこんで来た。不気味で、たよりなく、自分が分解されるやうな気持だつた。

すると、石中先生は、一切を忘れる寢床の休息が、ムラ／＼と欲しくなつて来たのである。

一心斎老人の家ですでに世界が異化されかけていた石中先生は、吉田青年から「急に陰気な調子で」このように語りかけられたことで、より一層動揺する。それは「伝説時代」とあるやうに、時代が「フイクシヨン」であるという奇抜な、だが決して一笑に付すことのできない見解を与えた動揺である。時代という〈地〉が「フイクシヨン」であるならば、〈図〉に当たる「デモクラシー」等が現実として定着するはずがなく、実体的ない状態で「ヒク／＼蠢めいてゐる」ほかない。

もちろん、単に「フイクシヨン」ではなく、その中でも「伝説」という語が選択されていることに留意する必要がある。

「伝説」の特徴は口伝えされていくことであり、「伝説時代」には、具現化されなのまま言葉だけが氾濫・伝播し、架空の〈戦後日本〉が仮構される時代という含意があろう。その模様的一端は、「終戦後はやり出した文化講演」において、「理想と現実の隔りがひどすぎて」、「喋つてる下から言葉が宙に浮いてい」くという石中先生の経験に表れている。

では「伝説時代」に何が起きるのかを卓近な例で示すのが、吉田青年の最後の発言である。彼が「八卦オヤヂの落胤だといふ説」は、眉唾物である上に自身の出生に関わる重大事であるにもかかわらず、「それが何でせう。どうせ僕は血なまぐさい伝説時代に住んでゐるのですから」と投げやりになり、それが〈真実〉として囁かれてゐる状況を放置する。すなわち「伝説時代」には、でたらめな言葉がかえつて環境になじみ、摩擦なく流布して信じられていくのである。

これを石中先生の側から見ると、眼前の外見から対照的な二人が親子であるという説そのものが「不気味」であるのに加え、それが一部で信じられ確からしさが生まれていくという二重の「不気味」さを感じるだろう。それが「自分が分解されるやうな気持」に転じる飛躍を考へる手掛かりは、「根ツ子町の巻」における「文学」の規定にあるのではないか。つまり、現実の一面に「デフォルマシオン」を施し、「フイクシヨン」としての「文学」を創造するのならば、現実を喪失した「伝説時代」には「文学」の仮構性が埋没することになる。その点こそが小説家・石中先生に眠りによる逃避を望ませたものではなかったか。この前に一心斎老人の家で聞いたいくつかの風変わりな話は、石中先生にとって他人事だつたため、「ふだん住んでゐるのとは、まるで違つた世界へ連れこまれていくやう」とあるように、日常的な世界は温存されており、眠りはあくまで生理的な行動だつた。だが、吉田青年の言葉は石中先生の足場を揺るがしたので、石中先生は逃避としての眠りを求めたのである。

ここまでラストシーンを詳しく読解してきたが、最後に指摘したいのは、「伝説時代」は戦中から連続しているということである。石中先生は、「敵の太平洋艦隊が全滅したために海の水が一二寸盛り上つた」といった一心齋老人の奇天烈な予言が、郷土新聞の三面記事に「デカ／＼と採り上げられて」いたことを「古い記憶」とし、「あの頃は、誰も彼も、ひどく血迷つてゐたものである」と、戦中を現在から切り離そうとしていた。だが第二節で確認したように、一心齋老人の言動は八卦を含め、敗戦を跨いでもほとんど変化がないにもかかわらず、のらりくらりと通用してしまっている。それは、「伝説時代」が戦中から継続しているからに他なるまい。「伝説時代」には、具現化されないまま言葉だけが氾濫・伝播し、架空の（戦後日本）が仮構される時代という含意があると先に述べたが、（戦後日本）の所に（大日本帝国）などの語を代入しても、全く違和感はない。作中でも言及されている「日本精神論」などがその例である。根ツ子町は、「天皇から失われた崇高性や權威をアメリカが代補する」という、「共同体の「現在」に意味を与える、超越的な他者（第三者の審級）の、速やかな、ほとんど間髪を入れない交替」を挟んで、長い「彷徨」を続けているのだ。

以上のように、風俗や世相の描写のうちに、作者の立場や態度が表れているこの小説は、傍観者として風俗や世相を写しただけと思われぬ風俗小説とは区別されるべきであり、「好色文学」とは区別される「芸術作品」であると見えよう。

おわりに

本稿は第二節において、「根ツ子町の巻」の背後にある、太宰の死というコンテクストに触れた。それを前節で論じた内容と接続し、結びとしたい。

石坂は随筆「太宰治の死」（前出）で、「それらの特性（「常識への反逆性」「自己虐使性」「孤高性」など——引用者注）は、たしかに北方的であり津軽的なものであつた。ダンスやコンクールや映画や農地改革や男女同権等に根底から揺すぶり荒された北方の地盤には、もうああいふ型が育たないであらう。その意味で、太宰は、滅びる者の美しい光芒を放つ最後の星であつたらう」と論じている。吉田青年の「反逆」が徹底されないのは、前述した要因に加え、戦後改革もそれとなつていくことが見えてこよう。（戦後日本）はまだ仮構の段階であれども、「彷徨」を続ける村は元来の風土を喪失しており、太宰のような際立った「型」の人物が育たないのだ。石坂は他に、「太宰の場合を、恋愛とか情死とかよぶのは、凡そ白々しい感じ」で、二人の死は「ちやうど枝から吹き払はれた落葉の中の二枚が、途中で偶然に重り合つたやうなものだ」とも述べている。

このように太宰の本質を見ようとする石坂が直面したに違いないのは、「情死報道の衝撃とその広範な反響」とに並行して、作家太宰治の神話もまた形成され、再編され⁽¹²⁾ていく状況である。太宰の死後、カストリ雑誌から新聞まであらゆるメディアが、そしておそらく巷間の会話も、虚実が混濁し、筆者・話

者の主観も濃厚な太宰語りで溢れた。石坂の随筆ももちろんその一つである。そうした膨大な太宰語りによる太宰の「神話」化という〈図〉を受けて、石坂は帰納的に「伝説時代」という〈地〉を明かしたとも考えられよう。眼前の個別的な風俗や世相という〈図〉から、社会や時代という〈地〉を探り当ててゐるのは、風俗小説の手法の一つである。

注

- (1) 風俗小説の評価をめぐるこうした歴史については、拙稿「アルチザン」の批評精神——『風俗小説論』を脱却するために——（『日本近代文学』二〇二三年五月）を参照されたい。
- (2) 山本芳明「風俗小説の可能性——湯浅克衛「ではあと」を中心に」（『研究年報』二〇二二年三月）一三二頁
- (3) この「あとがき」は、二刷までの文章から改稿された三刷以降のものである。そのため、出版年月は三刷に合わせている。
- (4) 「文芸往來の「小説と読者」といふ座談会。出席者は丹羽、石坂、石川（達）、井上、田村といふ顔触れ。当代のアルチザン代表スクラム組んでの放談振り」（無記名「天狗草紙」『文学草紙』一九四九年四月）、また「所謂風俗小説または中間小説と言われている一群の作風」を「洋次郎、達三、聖一、文雄、友一郎、泰次郎のある型の作品が代表している」（伊藤整「現代文学の可能性 文芸時評」『改造』一九五〇年一月）などと言及されているように、石坂は丹羽らとともに〈アルチザン〉たる風俗派の「代表」と見なされてきた作家である。
- (5) 尾崎秀樹「石坂洋次郎 石中先生行状記 地方俗話の笑い」（『朝日ジャーナル』一九六五年二月一九日）四三頁
- (6) 例外的に猿取哲（大宅壮一）は、「その卑猥な表現の中に、丁度俚謡などにみるような、ローカルな生活に即した明るくて健康なユモアがにじみ出て、その点でいく分救われている」と、「根ツ子町の巻」に対しては一定の理解を示しながらも、舟橋聖一や川口松太郎の「商業的效果をねらつたエロチシズムを批判し、「日本の文壇も職業的利益を守ることに忠実なだけではなく、自発的に反省し自粛する必要があるのではないか」と、文学者の側の責任を強調した（同時代人石坂洋次郎『毎日新聞』一九四八年一〇月一七日）。日比嘉高「私たちの存在意義をどう説明し直すか」（『日本近代文学』二〇一五年五月）一六三頁
- (8) 「根ツ子町の巻」の本文は、断らない限り『石中先生行状記』（新潮社、一九四九年四月）に拠る。
- (9) 日露戦争に従軍した経験を持ち、一九四八年に石中先生によって「六十ぐらゐ」と推定される一心齋老人が「四十二歳」の時の出来事は、弔詞が書かれた一九四六年から見て十年以上前になることは間違いない。
- (10) 石坂による戦中から占領期にかけての継続的なイデオロギー批判について、拙稿「石坂洋次郎の「人間的接触」という説得法——フイリピン従軍から『青い山脈』へ——」（『日本文学』二〇二二年八月）を参照されたい。
- (11) 大澤真幸『不可能性の時代』（岩波書店、二〇〇八年四月）二六頁
- (12) 川崎賢子「太宰治の情死報道——プランゲ文庫資料とその周辺から」（山本武利責任編集『新聞・雑誌・出版』ミネルヴァ書房、二〇〇五年一月）一四四頁

（すやま・ともひろ）